

東北応援ツアーレポート

「現地を訪問して想うこと」

2000年 法学部卒 岩瀬久子

岩手ツアーは盛岡駅からスタートし、昔懐かしい民話の世界「遠野伝承園」を観光したあと釜石へ。三陸鉄道の貸切り震災学習列車で釜石駅から終点の盛岡までの列車の旅。三陸鉄道では車内でガイドさんの説明があり、そのいくつかを紹介します。釜石の防波堤は、世界一の防潮堤となったが、7m～10mと高く海が見えなくなり、漁師によっては要らないという人もおられ、何よりも素晴らしかった景観は失われてしまいました。吉浜地区では、昭和三陸地震の津波被害が契機となり、集落は高台移転が実施され、低地は農地、高台は住宅地と住み分けができていたことから犠牲者が出なかったといえます。また、「釜石の奇跡」といわれる学校の管理下にあった生徒たちが全員助かったのは何も奇跡ではなく、「津波が来たら高いところに逃げろ！」という先人の教えを守り、子どもたちが率先して高い所に避難したからだといえます。三陸鉄道はトンネルが多く、車窓からの美しい海岸の景色が中断されてしまうのですが、トンネルが防波堤の役割を果たして山沿いの家には被害が少なかったといえます。お天気に恵まれ、穏やかな海を見ながらの35kmの道のりを70分かけての鉄道の旅でした。

気仙沼プラザホテルでは、校友会の方4名が講師となつての勉強会がありました。元教師の鈴木さんは、中一の時にチリ大津波を経験した。その時は被害が少なかったが、今回の震災では被害が大きかった。それは、松原や農地が宅地化して人々が海の近くに住むようになったからで、前回の大津波の経験が忘れられてしまった結果である。昔の人の教えを守って高台を住居地にした地区は助かったというお話は、伝承していかなければならない大切な教えだと思いました。また、大船渡市の元職員の金野さんは、「釜石の奇跡」に触れて学校では、毎年同じ防災訓練をすることが防災教育となり身を守ることができたのであって、いかに防災教育が重要であるかを説かれていました。復興の現状は、高台移転などに反対する人もあり復興は遅れていて、復興が一言では語れないことは、住民の思いやそれぞれの事情などで困難な状況が続いており、5年半という年月でも解決困難な問題であると思いました。5年半が過ぎた今は震災の痕跡はずいぶん整理されていましたが、若者が職を求め県外に出て行き人口減が深刻な問題となっているそうです。そうしたなか、近年大船渡市職員となった福岡市出身の立命館大学校友会の女性は、学生時代にボランティアで訪れたことが契機となって、就職先に大船渡市を選んだそうで、復興に力を入れている姿はたくましく、嬉しく思いました。復興のためにやらなくてはならない仕事は山積みだと思いますが、エールを送りたいと思います。

今回の東北応援ツアーの参加者には、2回目・3回目の方たちが多かったようです。その実私も2014年の福島ツアーに続いて2回目の参加です。前回は福島原発の被害の深刻さに直面し、原発に依存する日本の将来や福島の人たちの放射能汚染の影響と闘っている姿に心が痛み、日本の行く末を案じました。余談ですが、岩手ツアーの帰路、福島の磐梯・会津若松などを周り、「福島の素晴らしさを忘れないで、楽しんでほしい。」と言われた福島校友会の馬場さんの言葉を実践してきました。素晴らしい紅葉と自然に恵まれた福島を

満喫してきました。いつか岩手にももう一度ゆっくり旅してみたいと思います。

最後に、東北応援ツアーを企画、運営してくださった立命館大学の校友会事務局と岩手ツアーで私たちをお世話くださった岩手県の校友会の皆様へ、感謝とお礼を申し上げます。